

[制作記録]

“Hard Bodies: Contemporary Japanese Lacquer Sculpture” (ミネアポリス美術館／アメリカ) に出展して

Exhibiting at “Hard Bodies: Contemporary Japanese Lacquer Sculpture”
(Minneapolis Institute of Art / USA)

青木 千絵
AOKI Chie

1. はじめに

2017年10月7日～2018年6月24日、日本の現代漆彫刻¹に焦点をあてた展覧会が、米国ミネアポリス美術館²(写真①)で開催された。アメリカ人収集家クラーク氏のコレクションによるこの展覧会に参加する機会を得たので、企画者の意図をもとにその意義を考察し、自身の制作について考えたい。

2. クラーク氏による作品収集の経緯

クラーク財団(米国カリフォルニア州ハンフォード)は、1995年ウィラード(ビル)・クラークと妻エリザベスによって設立され、日本美術を常設する美術館を有し、研究機関としても多くの優秀な研究者を輩出してきた。そのコレクションは、中世から近代に及び、仏像・仏画、中世水墨画から浮世絵などまで幅広い分野を網羅するものであり、2002年には、里帰り展としてサントリー美術館他4館で、「アメリカから来た日本」と題した巡回展が開催された。

彼の収集姿勢は、既成の一般的な評価など関係なく、自分自身の眼で見て面白いと感じたものを集め、公の美術品として公開するという独自のものであり、日本人が忘れかけていた日本美術鑑賞の楽しみ方を想起させるものとして紹介された³。また、2009年春には、日本美術をアメリカ国民に正しく理解され愛好されることに多大な貢献をしたことが評

価され、旭日中綬章を授章している。

クラーク氏は、引き続き、現代日本の陶芸、竹製作品などの収集をした後、最晩年にあたる2011年、新たな分野探求に熱意を示した。当時クラークセンターのチーフキュレーターであったアンドレアス・マークス氏の勧めにより収集したのが、今回展示の現代の漆彫刻のコレクションである。ボストンにあったケイコギャラリーからのオファーで12点を手に入れた後、2012年からは直接日本各地に赴き、多くの作品を収集した。

例えば、青木の作品については、2013年3月、突然のメール連絡によってクラーク氏とマークス氏が2人でアトリエを訪れ、BODY07-2とBODY09-1「衝撃」の2点の購入を即決された(写真②)。後述するような重要な計画であることは知らないまま、これらの作品は、アメリカに旅立つこととなった。

2012年4月佐賀の井川健氏訪問から始まった漆彫刻を求める旅は、2013年に入って速度を増して繰り返され、4人の作家への新作依頼も行われて、1994年から2015年にかけての20年間に制作された漆彫刻30点以上が収集された。

クラーク氏は、本展覧会を見ることなく、2015年11月に亡くなられたのだが、当時既に80代であり、日本各地へ精力的な訪問をされた熱い思いに敬服するばかりである。没後、クラーク日本美術センターのコレクションは、全てミネアポリス美術館に寄贈された。

3. 収集の方針と展覧会企画意図

マークス氏は、現在はミネアポリス美術館の日本・韓国美術学芸部長であり、2008年から2013年までは、クラーク日本美術センターの館長及び学芸部長であった。

彼は、展覧会カタログ⁴(写真③)のINTRODUCTIONにおいて、彫刻作品の起源となる漆作品の歴史を辿り、今回の企画の意図を明らかにしている。以下、その本文からまとめてみる。

1980年代半ば、大学で漆芸を学んだ藤田俊彰、古伏脇司、田中信行（東京藝術大学出身）や、栗本夏樹（京都市立芸術大学出身）が、伝統的な工芸を離れて実験的な形を制作し始め、前者3人が「塗りの系譜」⁵(1993年／東京国立近代美術館工芸館)あるいは「素材の領分」⁶(1994年／同)において、栗本が「日本のスタジオクラフト展」(1995年／ヴィクトリアアンドアルバート美術館／ロンドン)において、紹介された時に、初めて彼らの革新的な作品が注目を集めることとなった。

彫刻やパネルのみの展示で、機能的作品を除外した初めての漆の展覧会は、1994年7月「漆の現在性」(神奈川県民ホール/横浜)であり、上記の4人の作家に加えて、松島さくら子（東京藝術大学出身）の作品3点も展示されたということである。

アメリカに於ける展覧会では、1996年ニューヨークとデンバーで開催された「Rainbows and Shimmering Bridges : Contemporary Japanese Lacquerware」によって、現代の漆彫刻が意識されることとなり、2004年には、サンフランシスコの工芸博物館で「New Urushi Forms」として、藤田、栗本、松島が特集された。また、ニューヨークのコウイチヤナギオリエントアルファインアートギャラリーでは、2004年から4回⁷にわたって田中の個展が開催されて好評を博したということである。

また、2012年、松島さくら子と笹井史恵のリーダーシップのもと東京、京都、福島県喜多方の3都市で開催された「漆うるわしの饗宴展」が、国際女性漆アート作家の新たな活躍として特筆されている⁸。

マークス氏は、漆の指導をしている日本の大学の中で、前述の革新的な作家たちが教鞭をとっている、東京藝術大学、京都市立芸術大学、金沢美術工芸大学を主要3大学と考え、これらの大学を起点に、それぞれ独特のスタイルを開発している次世代作家の作品を探し求めて収集したということである。今回展示されたのは、30才代から60才の作家16人による34点で、大きいものは4mにも及び、形、色彩、技法など、漆の様々な表現を展観できる多様な作品群となっている。(写真④)

この収集方針には、正直驚いたのだが、現代漆彫刻にしぼった興味深い展示は、制作工程も紹介されており多くの関心を集めていた。

出展作家16名の出身大学一覧			
生年／大学	東京芸大	京都市芸大	金沢美工大
1959年	2		
1960年代	2	1	
1970年代	3	1	1
1980年代		4	2

(いずれも博士課程あるいは修士課程修了)

田中教授が教鞭をとる金沢美術工芸大学出身は、村田佳彦、青木千絵、横内みえの3人。

結びとして、外国人でしか成し得ない収集により本展覧会を開催することで、漆表現の「素材的な発展が有望な未来のための基礎を築くことを期待している⁹」と述べている。漆という素材による拡張を改めて実感することとなった。

10月7日のオープニングにあたり、前夜の歓迎ディナーに続いて、当日は、レクチャーとランチが計画されており、日本美術のコレクターやギャラリーのディレクター、後援者なども招待される大規模なものであった。レクチャー後の質問、鑑賞の様子など、日本の現代漆彫刻への関心が高かったことは言うまでもない。さすがアメリカ、美術館の成り立ちを実感させられる体験であった。(写真⑤)

本展覧会は、閉会后、9月から2019年3月までMorikami Museum and Japanese Garden／フロリダで開催され、その後、移動展覧会を行う団体の協力のもと、アメリカ国内他会場でも開催予定である。

広く展示される機会を得て、今後アメリカの人々にどのように受容されていくのか、心より期待している。

4. 2018年 国内にて

2018年5月には「漆の現在2018展」(日本橋三越)、6月には「漆表現の現在」展(日本橋高島屋ギャラリーX)に出品する機会を得た。

前者は、幅広い世代のできるだけ幅広い地域で制作する、作風や技法や会派の別を超えた超党派的な漆表現を展覧しようとするもので、監修された外館和子氏は、「20世紀以降の三つの画期と第四の世代」の展開にふれたうえで、工芸を視点に、素材や技術に根ざした実在表現として、漆表現の多様性と質の高さの意義を述べておられる¹⁰。

後者は、田中信行教授企画協力の金沢美術工芸大学卒の作家による第1回展である。作家5名が漆造形作品(立体作品)を展示し、素材に根ざして各々が追求している多様な表現を提示することとなった。

今回、「Hard Bodies」展を始まりとする漆表現に特化した3展覧会に参加できたことは、漆表現の状況を体感するとともに、おかれた位置を確認し、自身の制作と向き合うよい機会となった。

5. おわりに

美しい艶を放ちながら堅牢な皮膜となる漆に魅せられ、上半身のない人体と抽象形態が融合した作品を制作し始めて、間もなく15年になろうとしている。漆は、私の作品において、私の精神世界を表現する上で重要な役割を担っており、漆を全面的に信頼し、すべてを委ねてきた。今後も、素材としての漆に真摯に対峙し、制作に励んでいきたい。

附記

本論文は平成30年度奨励研究の成果(の一部)である。

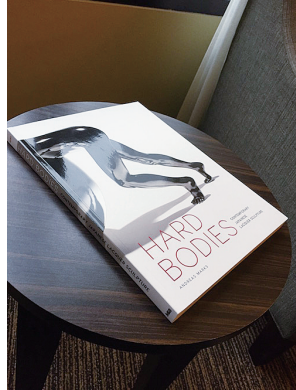
註

- 1 文化庁支援「ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業」の国際シンポジウム「ミュージアムにおける日本美術の再発見」(2018年1月東京国立博物館)において、マークス氏の発表「すばらしい新形態-漆工および竹工芸の伝統における変化」で、本展覧会名を「漆彫刻」と訳している。
<https://japan-art.org/wp-content/uploads/2018/03/FY2017.pdf> 2018年10月28日 最終確認
- 2 ミネソタ州にある、美術作品89,000点を有するアメリカ中西部最大の美術館。特に日本と韓国のコレクションは、7,000点以上あり、米国のトップ5コレクションの1つ。2013年には、クラークコレクションとパークコレクションにより、1,500点以上が追加された。
<https://new.artsmia.org/about/mission-and-history/>
<https://collections.artsmia.org/departments/japanese-and-korean-art> 2018年10月28日最終確認
- 3 小林忠「日本美術に魅せられたカウボーイ」、『アメリカから来た日本』(日本経済新聞社、2002)
- 4 『HARD BODIES CONTEMPORARY JAPANESE LACQUER SCULPTURE』(ANDREAS MARKS・Minneapolis Institute of Art・2017)
- 5 藤田、古伏脇、田中それぞれ2点
- 6 古伏脇、田中
- 7 2004年、2008年、2011年、2015年
- 8 青木も参加させていただいたが、自由な造形に挑む活気と華やかさに満ちた展覧会であった。
- 9 マークス氏は、本展覧会について、以下のように紹介している。「1959年以降生まれの芸術家で構成された、小規模でありながら新進的なサークルが、漆本来の特徴を見事に生かしつつ、革新的な概念に基づいた大型の作品を制作することにより、この素材に全く新しい方向性をもたらした。今回の展覧会では、これらの芸術家たちが21世紀に向けて漆をどのように飛躍させてきたかを、日本でさえもなかなか見られないほどの充実度で見せている。」
註1 pdf p49 参照
- 10 外館和子「漆の現在2018展に寄せて-漆表現の多様性の意義」、『漆の現在2018展』(日本橋三越本店 特選美術画廊2018)
外館氏は、lacquer sculpture = 漆の造形を推奨。

(あおき・ちえ 工芸科／漆・木工)
(2018年11月7日 受理)



①1915年開設時のボザール
様式の建築 SEASONAL
ENTRANCE



③「HARD BODIES :
CONTEMPORARY JAPANESE
LACQUER SCULPTURE」
カタログ



④展示会場



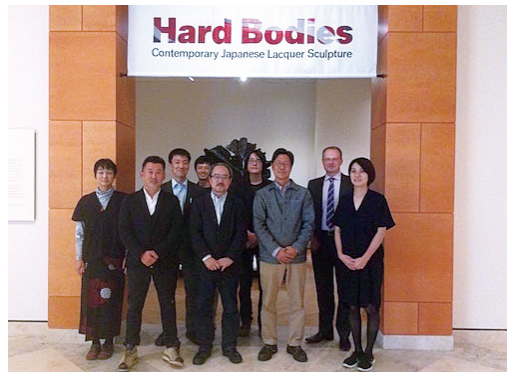
①現在のMAIN ENTRANCE



⑤展示会場



②青木のアトリエ（金沢市 2013年）にて



⑤オープニング出席の作家とマークス氏



④展示会場



⑤講堂でのレクチャーの様子